ささえる力 Power

「ささえる力 Power」は、情熱と誇りをもって働く「人」にスポットをあて水資源機構の仕事を紹介するコーナーです。

活かす

“危機管理”を模索する水先案内人

水資源機構では施設の老朽化や大規模地震への対策として、施設の改修や機器更新など施設機能を維持する取り組みを進めてきた。しかし、発生が危惧されている首都直下地震や南海トラフ巨大地震、気候変動に伴う短時間での大雨、火山噴火、化学反応による特殊な水質事故など、災害に関するリスクはこれまでの常識が通用しないほど不確実性が増しており、このような危機的事態にも確実に対応するため、危機管理体制を強化することが急務となっている。

このため、昨年４月に組織を改編し、旧管理事業部が担ってきた風水害などの事態対応をダム事業本部と水路事業本部が引き継ぎ、危機的な事態に対応するための体制整備や潜在的リスクの管理などを専門に担う「危機管理監」が新設された。

危機管理監を設置して１年。どのような役割を担ってきたのか、危機管理監付の小川に話を聞いた。

率直なディスカッション

水資源機構のリスク管理を専門に担う危機管理監。その仕事は「自然災害、施設事故、業務継続リスクなど組織の存続に関わる課題への対応であり、守備範囲は広く、水資源機構におけるリスク管理を行いつつ、想定外の危機への備えを進めることだと思います。」危機管理というと、風水害などの事態対応を思い浮かべるかもしれないが、この１年を振り返っただけでも、御嶽山の噴火、鳥インフルエンザ、北朝鮮のミサイル発射などにも対応してきている。大きな視点では、近い将来発生が危惧される大規模地震、気候変動に伴う短時間での大雨や長期化する渇水への備え、日常的な業務では、水質事故や漏水事故対応など多岐にわたる。

実に幅広いですね、と向けると「個々の問題には、これまでも各部署で対応してきています。危機的な

Profile

危機管理監付

小川　孝博 *Takahiro Ogawa*

昭和61年に水資源開発公団（現水資源機構）に入社。筑後川下流用水建設所（福岡県）、霞ヶ浦用水建設所（茨城県）、長良導水建設所（愛知県）等で工事監督や設計業務等を経験。その後本社や中部支社、長良導水管理所長を経て、平成26年４月より現職。

災害イメージ訓練の説明風景

災害イメージ訓練でのアドバイス

事態への対応についても、緊急時の連携体制の構築、資機材の備蓄など、事前の備えはかなり出来ていると思います。大切なのはこれらの経験やノウハウを有機的に結びつけるという体制づくり、そして職員全体の危機管理意識を高めてその能力を活かすことだと思います。」

そのためにこの1年は、いろいろな人と何度となくディスカッションを積み重ねてきた。たとえ相手が上司でも率直に自分の意見を言い、相手の考えを引き出してきた。「悪戦苦闘の1年でした。」と苦笑する。「危機管理体制の強化という方向性ははっきりしていますが、具体的に何をすれば良いのか、まだまだ手探りの部分が多いです。かたちにするのが大変です。」

現れ始めた変化

毎年行ってきた9月の防災訓練は、大きく様変わりした。「これまでのシナリオに基づき職員の役割などを確認する情報伝達訓練ではなく、災害発生時の対応を想像しながら自らの行動を考え、対応する上での課題を探る、災害イメージ訓練にたどり着きました。」さらに災害イメージ訓練で出された種々の課題に解決策を出すという、9月の続きとも言える訓練を1月に行った。「これまで担当部署が悩んでいながら解決できなかったことを本社全体で考える、という新たな取り組みです。これによって機構全体の課題として取り扱うことができ、関係各部が連携して取り組むことにより問題解決の迅速化にもつながりました。」

この1年で風水害などの防災対応においても、初動時から各班が連携して対応を開始するなど、職員の役割も変化してきた。「本社職員の意識も、自分自身が防災にどのように関わるのか、といったことを考えるように変わってきていると感じています。」まずは本社の意識改革から始め、現場への浸透を図っていく考えだ。

さらなる改革に向けて

現在の業務で大切なことはなにかと尋ねると、「組織や業務を俯瞰的に見ること」だと言う。目の前の問題に囚われずに、大局的に見るよう努力している。同時に各現場でのリスクについても常にウォッチしている。「理想をいえば、緊急時にたとえ情報が無くても先を読んで動き出せることでしょうか。そのためには、いつでもリスク管理の視点を忘れずに、施設や業務を見続けることが大切だと思います。」

これからの課題も多い。防災業務計画や各種マニュアルはきちんと機能するのか、機構全体の防災情報や危機意識の共有をどうするのか、資機材や機器類の整備は十分か。「まだまだこれからです。国全体の防災力強化の取り組みなど危機管理に関する意識が高まっている中で、水資源機構における危機管理の中枢を担っていることに責任とやりがいを感じています。」と力強く語ってくれた。潜在的リスクを見つけてそれに対応する、危機管理のエキスパートを目指して小川たちの取り組みは始まったばかりだ。

打合せでは、率直に意見をぶつけ合う

子供の頃からの遊び場は川や海などの水辺。泳ぎは達者で海で溺れた人を救助した経験があるとのこと。川ではアユを素手で捕まえるとか。・・・それって熊？